

### 自己評価および外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3390200479		
法人名	社会福祉法人純晴会		
事業所名	グループホーム うきすの里		
所在地	倉敷市粒江2503-3		
自己評価作成日	平成 24年 6 月 19 日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kai gokouhyou.jp/kai gosip/infomationPublic.do?JCD=3390200479&amp;SCD=320&amp;PCD=33">http://www.kai gokouhyou.jp/kai gosip/infomationPublic.do?JCD=3390200479&amp;SCD=320&amp;PCD=33</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社アウルメディカルサービス		
所在地	岡山市北区岩井二丁目2-18		
訪問調査日	平成 24年 7 月 26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「私たちはその人の人生を知り、今を、これからの生活を大切にします」という理念の下、認知症高齢者がこれまで過ごしてきた生活や人生の継続性を大切にし、本人の主体性・可能性を重視するケアの実践を目指している。家族と共に毎月誕生会の実施、地元幼稚園や小・中学校との交流会、充実した趣味・余暇活動の提供など、入所者の生活に潤いが持てるよう支援に力を入れている。家族に対して毎月家族会を開催して意見交換を行ったり、行事等に参加を呼びかけて入所者と交流できる機会を作っている。広報誌の発行、ホームページ上での活動報告等を行い、施設の情報を広く公開している。  
また、同法人内に特養があり、利用者が重度化した場合に次のステップの施設との連携が図りやすいことは、利用者の家族にとっても安心感があると言える。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

グループホームうきすの里は新しい事に前向きに挑戦していくバイタリティあふれる行動力、笑顔と愛を運ぶエンターティナーという施設長のイメージそのものである。職員の離職率が少ないというのもみんなが笑顔でやりがいを持って仕事ができおり、またそうできるように年3回の個人面談など施設がフォローしている証しだと思われる。また、話しの中で『最初が肝心』というキーワードを何度も聞いた。新人職員に対して1時間以上の時間をかけて理念の成り立ちから説明し理解を得る、利用者が入居するときには家族に対し本人が一番いい状態で生活できるように協力して頂くことや家族会への参加など説明を行っている。最初にきちんと説明をすることにより、支援の方針等の理解や協力を得やすい。また、週2回のマッサージや訪問歯科による口腔ケアなど外部からの援助を積極的に取り入れ、利用者の機能維持を図り、快適に生活することができるよう努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所独自の理念を掲げ、共有して業務に臨んでいる。その人の人生を知ること、今をそしてこれからの生活を大切にすることが、認知症介護の原点であると考えている。	新人職員のオリエンテーションにて理念の大切さについて1時間以上をかけて説明をしている。また、新人職員は3カ月間、指導日誌を記入しており、その中に「今日の行動を理念と照らし合わせて振り返る」という項目も設けられている。理念が高い理想のようなものではなく、毎日の支援の中で職員が頭に描き、行動を決めていく指針となっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎日の食材の買い出しの為、日常的に地域のスーパーに買い出しに出ている。また、近隣小学校・幼稚園との交流会にも定期的に開催・参加している。	毎日、食材の買い出しに地域のスーパーへ出向き、お店の人も顔を覚えてくれ声をかけてくれる。月1回の地域の清掃活動にも職員が参加している。また、法人で毎年恒例の納涼祭を行っており、大勢の来客がある。今年は打ち上げ花火をあげて、皆に楽しんでもらうと企画している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の人材育成への貢献として、中学生の夏ボランティアや高校生のインターンシップなど、実習生の受け入れを積極的に行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	H24年度より、家族会役員の方にも参加のご協力をいただきながら、施設や介護、認知症に関する情報提供と意見交換が行われている。また、実地指導や外部評価の結果や助言内容を公表している。	2ヶ月に1回、定期的開催している。参加者は家族会代表、民生委員、地域の代表、他のGH職員、地域包括職員等である。地域の情報交換や意見交換を行うと同時に、認知症のプロフェッショナルとして地域の窓口となることを繰り返して伝えている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	法人内に地域包括支援センターがあり、情報交換の頻度や協力関係は手厚い。しかし、倉敷市役所介護保険課の方を運営推進会議のメンバーとして加えているが、開催日の関係であまり参加していただけておらず、日頃から連絡を密にとっているとは言えない。	法人内にある地域包括支援センターからは常に情報が提供されている。倉敷市介護保険課には毎月入居状況を報告し、何かあれば直接出向き、相談することもある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、身体拘束に関する勉強会を法人全体で開催し、身体拘束のないケアをスタッフ全員で目指している。玄関の施錠は、セキュリティや利用者の安全確保のため、暗証番号でロックしてある。	毎年身体拘束の勉強会を開催し、身体拘束のないケアを目指している。家に帰りたいと訴えがあるときは、本人と一緒に散歩をするなど対応している。やむを得ず行う場合は、家族に説明し了承を得るようマニュアルを作成している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関する勉強会も法人全体で実施しており、虐待のないケアをスタッフ全員で目指している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要性のあるご利用者に対し、地域包括支援センターや裁判所等と連携を取りながら、H24.5月に新たに後見人を選任され、支援の実例がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関する重要説明は、契約前に十分に説明と質疑応答の時間を設け、納得いただいた上で契約を行いサービスを利用しているだけよう心がけている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の意見・要望について、訴えにきちんと耳を傾け、可能な限り実現できるように努めている。家族に関しては、玄関に意見箱を設置して随時意見・要望を受け付けており、毎月の家族会の場で集まった意見について話し合う時間も設けている。	家族会を毎月開催し、職員と家族の親交を深めている。入居契約時に利用者にとって一番の存在は家族なので、利用者が快適に生活ができるよう協力をしてほしいと説明し、納得して頂いている。家族会の後、職員が作った料理を利用者と一緒に食べながら、色々な話ができるよう配慮されている。	この夏には家族会と職員がピヤガーデンで親睦会を行う企画があると伺った。事業所を離れて、職員と家族がざっくばらんに話ができることで、お互いに近づき、何でも言い合える関係になりたいと初めての試みである。参加者も多いと聞いたので、また結果を伺いたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回の職員会議・ミーティングや各委員会を通じ、話し合いで集まった意見を議事録に起こし、全員で情報を共有するシステムを構築している。また、連絡ノートや社内メールのシステムを使い、情報の共有に努めている。	職員は年3回、自己評価を実施し、それを基に施設長と個人面談を行っている。面談の場で職員が頑張ってきたことに対する評価や今後どこにポイントをおいて頑張してほしいかなど施設長の視点から説明を行っている。また、施設長はできるだけ現場に出る等、職員が話しやすい関係作りを心がけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	自己評価シートを職員に記入させ、管理者、代表者により助言や評価の修正を行うことにより職員の業務の状況を把握している。またキャリアパスシートを作成し、やりがいのある職場環境を作っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新しく事業所に配属になる職員には新人業務日誌を日々記入させ、日々の課題や気付きなどの把握を行い助言、指導している。管理者には全国老人施設協議会の研修に参加させるなど、力量に応じた研修を受けさせている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	倉敷市介護保険事業者等連絡協議会のグループホーム部会や認知症と家族の会が主催する研修に参加するなど、他の同業者との交流の機会に努めている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前のアセスメントで家族や本人の意見・要望をしっかりと聞き、またサービスを始めてからも本人の要望などの話を傾聴し、安心して生活できるよう創意工夫を行っている。担当職員を決め、信頼関係を築きやすくしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との関わりも非常に大切と捉え、家族の希望や課題を解決できるよう努めている。家族会の際に担当職員との懇談時間を設け、家族の話を傾聴し実行することで信頼される関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	アセスメントの時点で知り得た情報や意見・要望を「ケアプラン目標作成マップ」に起こし、関連性や優先性を確認し、それを生活支援の礎としている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食事作りを介護の基幹におき、また職員が利用者と食事を共にするなどし、家庭的な環境・雰囲気大切にしている。風習や生活の知恵など、利用者から教わることも多くある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご利用者を中心に、家族と職員で生活を支えることの大切さを家族に説明し連携を図っている。面会や受診などの付き添い、外出など家族ならではのサポートを得ている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	親類、友人などの人間関係が継続できるよう、気兼ねなく面会や電話の取次ぎができるよう配慮している。	外出をした時に利用者の自宅の近くを車で通ったり、馴染みの店に買い物に行くことで、これまでのつながりを大切にしている。また、友人が面会にきたときには二人でゆっくりと話ができるよう配慮している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者同士の馴染みの人間関係が出来ている。集団を好まない利用者に対しても、マンツーマンでかかわる機会を可能な限り設け、孤立・孤独感をなるべく感じさせないように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も利用者やその家族が気軽に立ち寄れるよう、退去時の相談援助時に説明や声掛けを行っている。隣の特養へ移った利用者やご家族とも、法人全体の行事などで交流がある。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人一人の個性や性格を尊重しながら、アセスメント・モニタリング・カンファレンスを行い、出てくる意見・要望はもちろん、潜在的な訴えにも気づけるよう日々観察を行っている。	毎日の支援の中で、一人一人に声を掛け、思いや意向を聞くように心がけている。言葉に出せない思いも表情や行動などから推しはかるよう努めている。また、本人の人生を知るためにも家族からの話しを大事にしている。	利用者がとても元気で物怖じしない。これも日頃から職員が本人の思いや希望を聞き、対応しているからだと思われる。息子がアメリカにいる為、一度行きたいと話される利用者もおられるとのこと。一人一人の希望を実現できるように、ぜひとも検討してほしい。元氣な利用者と職員の姿を見ていると、夢のような話しも実現できるような気がし、期待しています。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事業所理念そのものであり、入所時のアセスメントにおいて、生活歴の情報収集には特に力を入れて行っている。またそれが活かされるよう日々工夫を凝らしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の記録や食事・排泄チェック表を通し、生活パターンの理解・把握に努めている。ADLに関しても、定期的にあセスメントの見直しを行い、現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	「ケアプラン作成マップ」を全スタッフで意見を出し合って作成し、それを元に解決すべき課題について検討しケアプランを作成している。	「ケアプラン作成マップ」に全職員が集めた情報や意見を記入している。これを基にケアプラン原案作成後、カンファレンスにて検討した上、決定している。訪問診察時にかかりつけ医に注意すること等尋ねるようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	支援内容や生活の様子の記録として、個別に詳細に記録を行っている。月に一度、ユニット内でミーティングを行い介護方法の修正、統一を図っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々の状況や状態に合わせた支援を行えるよう、また必要と思われることはすぐ対応できるよう、連絡帳や社内メールを使い情報共有を行い取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣小学校・幼稚園との交流会や地域を巻き込んだ納涼祭などを通じ、地域に囲まれ、地域と共に生活していることを実感していただけように取り組んでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前に本人・家族とかかりつけ医について相談している。家族による受診の際は、情報を細かく提供し適切な医療を受けられるよう支援している。連携している医師も24時間体制でバックアップしてくれている。	2週間毎にかかりつけ医の往診がある。また、24時間いつでも連絡ができ、適切な対応を指導してもらうことができる。また、患部の写真をメール送信し、医師に診てもらい、今後の指示を仰ぐなどシステム化も図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	配置している看護師により、内服薬の管理や必要な処置、受診・往診時のパイプ役を担い、的確な医療を受ける体制を築いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先には、既往歴などの基本情報はもちろん、日々の生活の様子や、入院に至るまでの経過の詳細を情報提供書を作成して伝え、早期改善早期退院できるよう配慮している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	早い段階でサービス担当者会議や家族を招いてのカンファレンスを行い、事業所でできる対応についての説明を十分に行い、近い将来迎えるであろう次のステップについて、あらゆる視点で協議しながら準備を行っている。	利用者本人の身体状況や精神的な負担を考え、本人にとって快適に生活できる場所はどこかを第一に考えている。入居時には同法人の特養に申込みされる方も多く、法人全体で利用者を引き受けるという意識を持って支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	倉敷消防局員立会いのもと、蘇生術訓練を年1回行っている。緊急時対応マニュアルの整備を行い、平素より目を通し、不測の事態に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、避難訓練(夜間想定含む)を行っている。併設している特養や地域住民と連携を図りながらの避難訓練も実施している。	年2回、避難訓練を行っている。地域住民にも協力してもらい、事業所の中を知って頂くことも重要だと考えている。夜間想定訓練では2人の職員以外は決して手を出さずに見守り、連携や段取りの大切さを意識するように訓練をしている。訓練後の反省で、外に避難した利用者には名札を付けて誰か分かるようにした方がいい等の意見があり、取り入れている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の発言には、可能な限り同意・共感の態度で対応している。苦情にも真摯に対応し改善に努めている。申し送りの際は、プライバシーに関わる利用者の情報が他者に聞こえないよう、場所や声のボリュームに配慮している。	施設長自ら作成した「接遇について」というタイトルの資料を職員全員に配布し、折に触れて見直しをしてもらうよう指導している。職員一人一人が事業所の顔であることを自覚し、利用者を尊重した言葉かけを行うよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話の機会を多く持てるよう、ゆとりあるタイムテーブルで日課をこなしている。会話の中で感情表出ができるよう、話を傾聴したり、親身になって受け答えするように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れとしてある程度の日課は作っているが、その中で生活歴や興味のあることに関連した余暇の提供や、それをいつどこで誰と行うか、自己決定のもと活動している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的な出張理美容を利用している。衣類のコーディネートと一緒に選んだり、手鏡・くしを手渡ししたり、いつまでも整容・身だしなみを忘れないよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事作りを日常生活支援の基幹に捉え、買出しから準備・調理・片付けの工程に利用者も参加してもらっている。ご利用者に献立のリクエストを伺ったり、季節の食材・メニューに触れる機会を作っている。	週3回、食材の買い出しに利用者と一緒に出掛ける事から始まり、できることは一緒にしてもらうよう心掛けている。また行事食など楽しみも多い。訪問当日は流しそうめん。職員お手製の竹の台にそうめんやトマト、ぶどう等が流され、利用者が上手にお箸でつまんでいた。食べる事を忘れて取ることに集中している真剣な利用者の姿もあり、職員も一緒に楽しみ、笑顔があふれていた。	訪問当日、利用者も職員も一緒に楽しく時間を過ごしているのを感じた。同時に職員が忙しく動いているため、職員ペースになりがちな一面も感じた。利用者にとって安全で楽しい時間となるよう役割分担など検討を期待します。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量のチェックは3食行い、そのデータを健康バロメーターのひとつとしている。カロリーや水分量制限のある方に関しては、その情報をスタッフ全員で共有している。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	可能な限り、毎食後の口腔ケアを勧めている。また月4回、訪問歯科診療にて、専門職からの的確な指導・ケアを受けることができている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	課題のある方については、ミーティングで話し合い、定時のトイレ誘導を行ったり、時系列で見やすい排泄チェックシートを使用しながら、個々の排泄パターンや排便コントロールを行っている。	排泄チェックシートによりパターンを把握し、トイレへの誘導を適宜行っている。また、紙パンツも普通型、薄型と種類を変える等一人一人に合ったものを選択し、快適に過ごせるよう努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	適度な水分・運動を行いながら便秘改善に努めている。乳製品の提供や、野菜嫌いな方の提供方法など、食事面からの工夫も行っている。排泄状況を看護師に申し送り、必要に応じ薬の調節も行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的に毎日実施し、可能な限り入浴回数や時間帯などの希望を聞きながら対応することに努めている。入浴出来なくても足浴や清拭を行い、個々の希望に添いながら清潔保持出来るよう支援している。	毎日入浴を実施しており、特別な事はなくても利用者が入りたいときにゆっくりと入浴してもらえるよう努めている。日曜日は露天風呂の日として同法人の露天風呂やジャグジーで入浴し、利用者もとても喜んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご利用者の生活リズムに合わせて、休息や午睡を実施している。それぞれの好む照明や室温・衣類調節に配慮し、特別な場合を除き、目が覚めるまでゆっくり休んでいただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書をいつでも目を通せるようにファイリングし、変更などがあればその最新の情報を全職員で共有している。担当の薬剤師とは、特に密接に連携をとっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴を生かしたレクリエーションや余暇活動への参加、また日常的な役割を創設し勧めている。アルコール依存の既往がある方への配慮の為、アルコールの提供は行っていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩や花壇・菜園の手入れなどを利用し、可能な限り外の空気に入れる機会を作れるよう努力している。日々の生活に変化や潤いを与えるため、定期的に外出計画を立て、移りゆく季節を肌で感じていただいている。食材買出しで日常的に外出する機会がある。	朝のゴミ出しを兼ねた散歩、畑のお世話、食材の買い出しなど日常生活の中で外へでる機会を取り入れている。また、家族の協力を得ながら、季節毎に初詣や花見など外出の企画をしている。中、高校生のボランティアがあるときには一緒に話をしながら近辺を散歩するなどの時間を設けている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族了解のもと、小遣いを個人管理することは規制していない。外出に必要な日用品やアクセサリを買ったり、併設施設にジュースを買いに行ったりし、それが気晴らしや自己決定につながっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望者には連絡を取り次いだり、また家族からの電話を利用者につないだりしている。携帯電話を持っている方もいる。余暇活動で絵手紙を実施し、友人と葉書のやり取りを行う方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共同スペースには、散歩の際に摘んできた草花を活けたり、季節の掲示物を作成・掲示し、家庭的雰囲気作りに努めている。気候の良い時期は、ウッドデッキでティータイムを過ごし、開放的な雰囲気作りに努めている。	木目調で天井が高く、窓から山や田んぼが見え、とても開放感がある。テーブルやソファなどシンプルに配置しており、イベントがあるときには移動しやすいよう工夫されている。壁には利用者の作品や行事の写真が掲示されており、季節を感じるができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共同スペースにソファや椅子を点在させ、個人または気の合う者同士での空間が確保できるよう、自己決定のもと、思い思いのスペースで過ごしていただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具や思い入れのある品を持ち参し、家庭的な雰囲気・住み慣れた環境に少しでも近づくよう工夫している。家具の配置については、利用者が生活しやすいよう、本人や家族の希望を聞きながら配置している。	居室の前には本人の趣味や好きな物をプレートにした名札、『西2丁目7番地』などそれぞれの住所が掲げられている。また入り口のドアもベッドなど出入りしやすいよう広くなっており、機能的である。使い慣れた家具やテーブル、自転車こぎなどそれぞれ個性のあるお部屋となっており、居心地のよい空間作りを行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	危険の芽を職員が摘み、安全な環境で生活していただけるよう、リスク予防の検討会を毎月行い、職員に危険に対する意識付けを行っている。		